

世界の民族船



今回のテーマは
「**世界の民族船**」
と題しまして
世界各国の人や物を乗せて
水上を渡る民族船の
展示をしております。

2013年10月1日(火)



2014年2月28日(金)

展示期間中の開館時間・休館日

期間	平日・土曜	日曜・祝日
10月1日～11月1日	9:00～21:00	休館
11月2日	9:00～18:00	
11月3日～5日	休館	
11月6日～12月25日	9:00～21:00	休館
12月26日～1月5日	休館	
1月6日～2月5日	8:45～21:00	
2月6日～2月28日	9:00～18:00	休館

※ 開館時間や開催期間は変更になることがあります。
図書館 HP、掲示板上にてご確認のうえご来館ください。

サバニ



沖縄地方で使われる民俗的な小船。本来丸木船であったが、近年は材料的な制約からはぎ合わせ船となる。幅の狭い細長い船型を特徴とし、櫂、または小さな帆をあげて航海する。

葦舟

アシでつくった水上交通具の一つ。古事記と日本書紀の列島創造神話において記されていることから、古代日本にあしぶね葦舟があったことが想像できる。

現在でも南米ペルーのチチカカ湖やボリビアで、実際に漁に使用されている。



テッパイ

竹を編んだ台湾の筏。いかだ竹筏と書く。太い竹の茎で造られ、高波や砕け波に耐えるのに理想的な船型になっている。



カヌー

舵や竜骨（船の背骨）などを用いない原始的な構造を持つ小舟。北米先住民の間で発達した。軽くて丈夫な木のフレームに樺の樹皮を張り、樹脂で防水を施してある。



生物が海から陸へ這い出してから数億年。

人類は水上へ帰還しました。船という手段を手に入れて…

人々が創り出した船の数々をご紹介します。

丸木舟



1本の木をくりぶねくり抜いてつくる舟。独木舟とも記し、くりぶね削舟ともいう。新石器時代、磨製の石斧などによる木工技術の進歩によって発達を遂げた。

ジャンク



たらい舟

佐渡島南橋の小木海岸でサザエやアワビ、ワカメなどを獲る際に使用される。江戸時代から明治初期にかけて、洗濯桶から改良を重ねて考案された。



カヤック

エスキモーやイヌイトなど極北に住む先住民族が水上での猟に用いる1人乗りのカヌー。木の枠組みをアザラシの皮で覆い、中央に穴をあけて操縦者が座れるようにしてある。



中国水域で数千年にわたって広く使われてきた帆船の総称。船内は、竹の節からの着想と伝えられる多数の水密横隔壁で区画されており、船体の横強力が大きく、一部が破損浸水しても沈没することがない。

TRIVIA

船の誕生

太古、人類はさまざまな方法を使って川や湖を渡った。彼らは泳ぎ、水に浮くものにつかまり、やがて筏^{いかだ}を作って川を下った。最初期の舟は、動物の皮から土器まで多様な材料を使って作られた。その後多くの社会が、木材を切って部材を作りそれを組み立てるのが一番だという結論に達した。そうして生み出された古代の舟は、竿で進んだり、綱で引いたり、パドルや櫂^{かい}を使って漕いだり、木の枝や布で作った帆に風を受けて走ったりした。

4000年以上前の世界でも、舟の用途は、現代人の船舶の用途とほとんど変わることがなかった。漁業や、河川や海での物資と人間の輸送、戦争、そしてレジャーにも舟が使われていたのである。

建造の方法

船を大きくし、船体の形を多様にするのを可能にしたのは、板張りのボートの出現であった。たいていの古代文明において、まず船体の外殻を造り、そのあとで強化のために枠を組み込んだ。エジプト人が建造した最初の板張りボートは、おそらく縫い合わされたものであろう。その後のギリシア・ローマ時代になると、標準的な方法は、船板を切り出し、それを次の板に繋げるホゾにはめ込むやり方へと変化した。

かんこ船



船の数え方

船を数える際には、台という単位は用いない。艦船^{せき}は1隻、2隻と数え、和船や小舟^{そう}には1艘、2艘という数え方が使われる。

船乗りの場合は独自の習慣があり、船を1杯、2杯と数える。商船^{せん}や軍艦^{かん}を指す際も、船乗りは『ふね』のことを船とか艦とは言わずに、「あのフネ」、「このフネ」、「うちのフネ」、「よそのフネ」などと呼ぶ。

船を読む

歴史を語る重要な文献においても、船に関する興味深い記述が見られる。

それらの中でも特にイメージを膨らませる助けとなってくれるのが、かの有名なマルコ・ポーロが『東方見聞録』（1299年）の中で、13世紀の大型ジャンクについて語っている部分である。それによれば、船はモミ材で作られ、甲板は1層で、60の船室（キャビン）に分かれており、各船室に1人ずつ商人が乗っていたという。マストは4本あり、必要ならばさらに2本を立てることができた。マルコ・ポーロは、300人の乗組員を乗せ、1本を4人がかりで漕ぐ巨大なオールによって推進する船が、5000～6000籠の胡椒を運んでいたと述べている。

船に関する記述は、日本にも残っている。左に紹介した葦舟は、古事記と日本書紀の列島創造神話において記されており、これらが編纂された奈良時代に普及していたと思われる。ちなみに葦舟が登場するのは、伊弉諾尊^{いざなぎのみこと}と伊弉冉尊^{いざなみのみこと}との間に最初に生まれた蛭児^{ひるこ}を葦舟に乗せて流すという場面である。

鹿児島型漁船



参考文献の紹介

『船の歴史文化図鑑：船と航海の世界史』

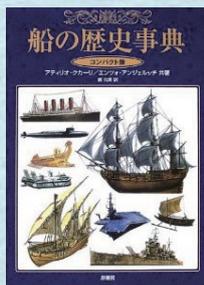
ブライアン・レイヴァリ著
増田義郎, 武井摩利訳
悠書館, 2007
配置場所：ポーアイ館 3階北
請求記号：550.2/LAV/F
資料ID：107090188



古代から現代までのあらゆる船を網羅した一冊。丁寧な説明と多数の船のイラストで、船に詳しくない人でも簡単に読み進めることができます。木の幹を使った簡単な舟から帆へと移り変わり、櫂船、帆船、蒸気船から現代の船まで、歴史的背景とともに幅広く理解できる上質な知識の詰まった事典です。

『船の歴史事典』

アティリオ・クカーリ,
エンツォ・アンジェルッチ共著
堀元美訳
原書房, 2002
配置場所：ポーアイ館 3階北
請求記号：550.2/CUC/F
資料ID：102048788



船と人との5000年に及ぶ歴史を扱った美しい図鑑。まるでその場に立ち会っているかのような、臨場感溢れるカラーのイラストは必見です。船だけでなく、海戦や航海の様子、大航海時代の航海者たちのエピソードも写真と共に紹介されており、神戸港に浮かぶ船に目を向ける回数が増えること間違いなしです。

竜頭船



こんなユニークな船も
展示してあります♪

プーナン



ダウ



編集後記

Sea Scape 第15号の作成にあたって民族船の歴史を調べていくうちに、古代の人々は生きる手段として身近なものから舟を作り、それはやがて巨大な船へと進化し、海上貿易の発展へと繋がってきたということを知りました。

今回の展示で一番目を引いたのが、「プーナン」という動物の皮に空気を入れてふくらませた浮き袋です。一度空気を抜くと、皮は丸太よりはるかに軽く、たくさんの川をわたる長旅には、大きな利点となったそうです。今でも黄河では、羊皮の袋を木枠につなぎ合わせて造った羊皮いかだがよみがえり、新しい観光スポットとなっているようです。

是非、民族の知恵から生まれた「世界の民族船」をご覧ください、船の歴史の面白さだけでなく、古代の人が自然と共に生きてきた証をご覧ください。そこには、現代に生きる私たちが忘れてきている大切なヒントがあるかもしれません。

SeaScape

第15号 2013年11月19日発行

発行・編集 神戸学院大学ポートアイランドキャンパス図書館

〒650-8586 神戸市中央区港島1丁目1番3